

研究ノート

わが国の高等教育における サービス・ラーニングの傾向に関する一考察 —学びと貢献、慈善と変革による分類を通して—

眞所 佳代

北海道安平町立追分中学校 教諭（創価大学教職研究科）

A trend of Service Learning Applied to Higher Education in Japan —Using the benchmark of “learning versus service” and “charity versus change”—

Kayo Madokoro

Graduate School of Teacher Education, Soka University

キーワード：サービス・ラーニング、慈善、変革、学び、貢献

Keywords: Service Learning, Charity, Change, Learning, Service

抄録

本研究は、わが国の高等教育におけるサービス・ラーニングについて、Furco による経験的教育のバランス（学びと貢献）および Westheimer と Kahne による慈善と変革という指標によって分類し、その傾向を明らかにしたものである。その結果、学びに焦点を当てた慈善志向の社会適応型サービス・ラーニングと学びに焦点を当てた変革志向の研究実践型サービ

ス・ラーニングの傾向があることがわかった。こうしたタイプのサービス・ラーニングによって、学生の自己理解や他人との関わり方、社会に対する意識の変容が見られることから、サービス・ラーニングにおける経験を積み重ねることによって、社会のために考え行動できる学生を育成することができると考えられる。

1. 序論

1.1. 研究の背景と目的

変化が激しく、予測困難な社会にあって、答えのない課題に対して最善の解を導き出す能力を育成することが大学教育に求められている。かつて大学はエリート教育を行う場であったが、大学教育のユニバーサル化が進み、様々な学生に対応した教育が求められるようになった。また、いわゆる「良い大学」に進学して「良い企業」に就職し、安定した生活を築くという単線型の進路イメージの実現も困難になった。それにもかかわらず、初等中等教育においては、偏差値の高い上級学校への進学を目的とした進路指導・学習指導にならざるを得ない状況がある。生徒は大学進学が勉強の目的となり、大学で何のために学ぶのかという目的をもたないまま大学に入学するために、学習意欲がわかなかったり、受験勉強のような答えのはっきりしたものは慣れていても、答えのない課題に対して自分の考えを述べるという学習に対応できなかったりする。加えて、変化が激しい時代において知識や技術がすぐに陳腐化していく上、しくみがわからなくとも便利に使える道具があふれ、考えなくともとりあえず生活していけるという環境にあって、学修への動機づけと、モノやサービスを受ける側から提供する側への自覚の転換を促し、あえて課題を発見し解決していく能力を育成するためには、教育する側の意

図的な取り組みが求められる。

中央教育審議会は、こうした状況に対応するためには大学教育の質的転換が必要であるとして、その方策の一つとしてサービス・ラーニング（以下 SL）の導入を提唱している¹。SLは米国に出自をもち、アカデミックなカリキュラムと地域への貢献活動を連携させる教育方法であり、大学での学修の実体化や市民性の涵養、問題解決能力の育成、利他性の涵養等を目的としている²。SLが目的とするところの能力や資質の育成は、今日各国で共通に必要とされるものであり、このため SL は多くの国で取り入れられるようになっている³。拡がりの背景には SL が幅広い目的をもち、多義的に捉えることが可能であることをあげることでもある。そこで米国の研究者を中心に多様に展開される SL の類型化が行われ、目的、活動、育成される資質等についての整理が行われている。米国と日本では社会的、教育的背景は異なるものの、SLが必要とされる契機には共通性があることから、米国における SL の類型は日本の SL の傾向を分析する指標としても援用可能であるものと考えられる。

なお、類型は日本でも紹介されているが、日本で展開されている SL の事例をその類型を参照して整理したものは管見の限り見当たらない。

そこで本研究では、米国で用いられている類型を援用し、わが国の SL を分析するための類型（4 象限）を新たに作成した。次にわが国の

- 1 中央教育審議会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（審議まとめ）、2012年
- 2 SLの要素について宮崎（1998）は①実社会において、実際に重要かつ必要性のあるサービスであること、②コミュニティからの強い支持と関与を増加させるものであること、③準備、監督、生徒の経験の総括などを含む計画されたプログラムであること、④伝統的な教科のカリキュラムに貢献し、それを発展させるものであることとまとめている。（宮崎猛「アメリカにおける『サービスラーニング』の動向と意義」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No. 80、1998年）
- 3 例えば、SLの学会 International Association for Research on Service-Learning and Community Engagement (IARSLCE) のプログラム（2012年12月米国ボルチモアで開催）を参照すると、米国、カナダ、中国、香港、オーストラリア、韓国、ニュージーランド、イギリス等10カ国以上からの発表を確認することができる。また、アジア地域においても香港の嶺南大学を中心とする Asia-Pacific Regional Conference on Service-Learning が開催され、2013年で第4回目の開催をむかえる。

SL のデータベースを提供している SL クリアリングハウスホームページの事例⁴を手掛かりとし、わが国の高等教育における SL の実践例を整理して類型（4 象限）にあてはめ、全体的な傾向についての検討を行った。検討をもとに特徴的な 2 つの大学を抽出し、インタビュー調査を行い、大学側の SL 導入の意図と方法、実際の効果についてより詳細な分析を行い、今後の SL の展開に資する事項を明らかにすることとした。

1.2. 分析の視点

①社会貢献と学生の学び

実践によって学ぶ教育方法としては、これまでもボランティアや実習、インターンシップなどが行われてきたが、SL は学びと貢献を両立させるところに特徴がある。しかし、現実には SL といっても学びまたは貢献のどちらかに焦点が置かれていることも多い。この関係性について Furco が論じており、図式化している⁵

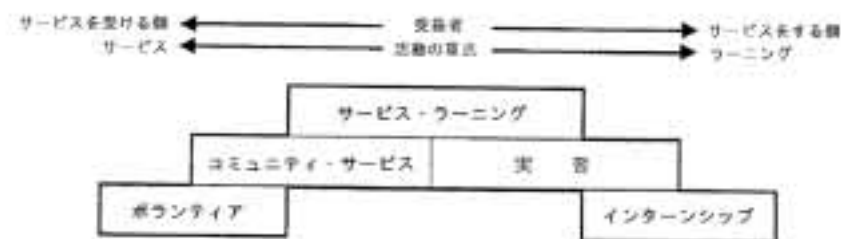
【図 1】。この図は、経験的な教育が、学びと貢献のいずれの性格が強いかによって 5 つに分類されることを示した指標であり、双方のバランスがとれた状態が SL であることを示している。貢献（サービス）に焦点を当てる側面が強調される活動はボランティアである。コミュニティサービスは貢献に焦点をあてるが、学ぶ側が問題意識を持って活動に取り組むような活動

である分、学び（ラーニング）の要素が加わるため、指標の中心に近づく。学びに焦点を当てる側面が強調される活動はインターンシップである。インターンシップはそれによって学ぶ側が知識やスキルを獲得する活動である。実習はやはり学びに焦点を当てる活動であるが、いかに貢献するかということを考えさせる要素がインターンシップよりも強い分、指標の中心に近づくということを示している。

Furco 自身「経験的な教育プログラムというものは、その関係性によって変化するものであり、いろいろなレベルがある。特定の時点ではコミュニティサービスはサービスの受け手の利益をもっと焦点化するようになり、（サービスとラーニングの）中心から離れるかもしれない。だが、違う時点になると、同じプログラムでも、サービスとラーニング、サービスする側と受ける側の利益が公平になっているかもしれない。」と述べているように、経験的な教育は固定的なものではなく、時と状況によって変化するものであり、そのうちの一つである SL も同様である。しかしながら学びと貢献は SL の根本的な要素であるから、プログラム全体としてどのような性格をもつかを判断する類型の一つと言えるだろう。

②慈善志向と変革志向

Westheimer と Kahne は SL の 目 的 は「慈



※Furco, Andrew. "Service-Learning: A Balanced Approach to Experiential Education." (1996)より筆者訳出

図1 サービスプログラムの特徴

- 4 市民教育のためのサービス・ラーニング・クリアリングハウスホームページ、事例データベース、<http://servicelearning.jp/database/>よりインターネットで入手
- 5 Furco, Andrew. (1996). Service-Learning: A Balanced Approach to Experiential Education. Expanding Boundaries: Service and Learning. Washington DC: Corporation for National Service, 2-6

善」と「変革」に大別できるとし、これを表にしている⁶【表1】。慈善を目標とするSLは、施しを与えたり、民主主義社会に生きる市民としての義務を果たせるようになったり、学んだことを現実の社会の中で実践する経験を重ねることができるような活動である。変革を目標とするSLは、サービスを受ける側の生活が、サービスを受けることによってどのようなものかを熟慮したり、政策に批判的な意見を持ち、政治に参加するためのスキルを獲得し、社会的な結束を構成することで社会を改善しようとしたり、行動と批判を結び付けることによって、持っている知識と社会参画への理解を変容させていくような活動である。宮崎はこの「慈善」と「変革」について、主に中等教育における奉仕との関連で、慈善と変革では期待される教育効果が大きく異なり、SLの性格も異なってくることを指摘し、両者のバランスが必要であると論じている⁷。

WestheimerとKahneは「(この表に示される) 道徳、政治、知識という分野は互いに関連しており、完全に分けられるものではない。ま

た、同じ活動をしていても学生によって経験することとは異なる。したがってこの枠組みは完全なものではない」と述べている。しかしながら、高等教育に求められる学士力の「市民としての社会的責任」や「獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力」等の項目⁸は、前者が慈善的側面、後者が変革的側面を志向しているものと捉えることができることから、日本の高等教育のSLを分析する指標としても有益であると考えられ、これを活用することとした。

1.3. SLの類型

SLの焦点と志向の組み合わせについて座標で表し、それをもとに4象限に分類したものが【図2】である。

【図2】の4象限のうち、タイプ1は、活動の焦点が貢献にあり、主に貢献を受ける側に利益があり、慈善志向の場合である。貢献を受ける側のニーズに応じた活動が中心となるから、ボランティア的な活動が行われると考えられる

【表1】SLの目標

	道徳 ⁹	政治	知識
慈善	《施し》求めるものを与える。	《市民的義務》民主主義社会に生きる市民として適切な教育を受ける。	《付加的な経験》机上の知識だけではなく、学んだことを現実の社会の中で実践するという経験を重ねる ¹⁰ 。
変革	《配慮》配慮をすることによって、受ける側の生活がどうなるかについて熟慮する。	《社会的改善》社会に積極的に参加する。「強い民主政治」。政策に批判的な意見を持ち、政治に参加するためのスキルを獲得し、社会的な結束を構成する。	《変化力のある経験》行動と批判的な研究が結びつく。その過程を通して、原則としての知識と、彼らが従事する社会問題に参画することの両方の理解を変容させる。

※Kahne, Joseph. and Westheimer, Joel. “In the Service of What? The politics of Service learning”(1996) より筆者訳出・作成

6 Kahne, Joseph. And Westheimer, Joel. (1996) In the Service of What? The politics of Service Learning, Phi Delta Kappan.

7 宮崎猛「社会奉仕体験活動の展開への示唆—米国サービス・ラーニングをめぐる議論に着目して—」創価大学『創大教育研究』No.20、2011年、p.9

8 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」(答申)、2009年

9 原文における慈善の“giving”、変革の“caring”を本稿では説明内容を踏まえ、それぞれ「施し」「配慮」と訳した。

10 この項目について原文には直接の説明はないが、“Additive Experience”から本稿ではこのように解釈した。

ため、《ボランティア型》とする。この傾向が強いと、相手のニーズに従ってただ活動するだけになる場合があるため、貢献活動を行う側が主体性を持って何かを学ぶこと、そして言われるがままではなく、どうすればより良い貢献活動になるのかを考えることが必要であると考えられる。

タイプ2は、活動の焦点が学びにあり、主に貢献活動を行う学生の方に利益があり、慈善志向の場合である。社会人として必要な知識や技能を学生が獲得する活動が行われると考えられるため《社会適応型》とする。社会に求められる力を伸ばしていくことが期待されるが、この傾向が強くなりすぎると、社会に求められるからといって無批判に社会に迎合することにもなりかねない。したがって、学生自身が、なぜその知識や技能が求められるのかということを批判的に考えながら、相手のことを思った貢献活動を行うことが必要であると考えられる。

タイプ3は、活動の焦点が貢献にあり、主に貢献を受ける側に利益があり、変革志向の場合である。このような活動では、貢献を受ける側の立場に立ってその課題を解決していく活動が行われると考えられるため、《課題解決型》とする。この傾向が強いと、貢献活動を行う学生

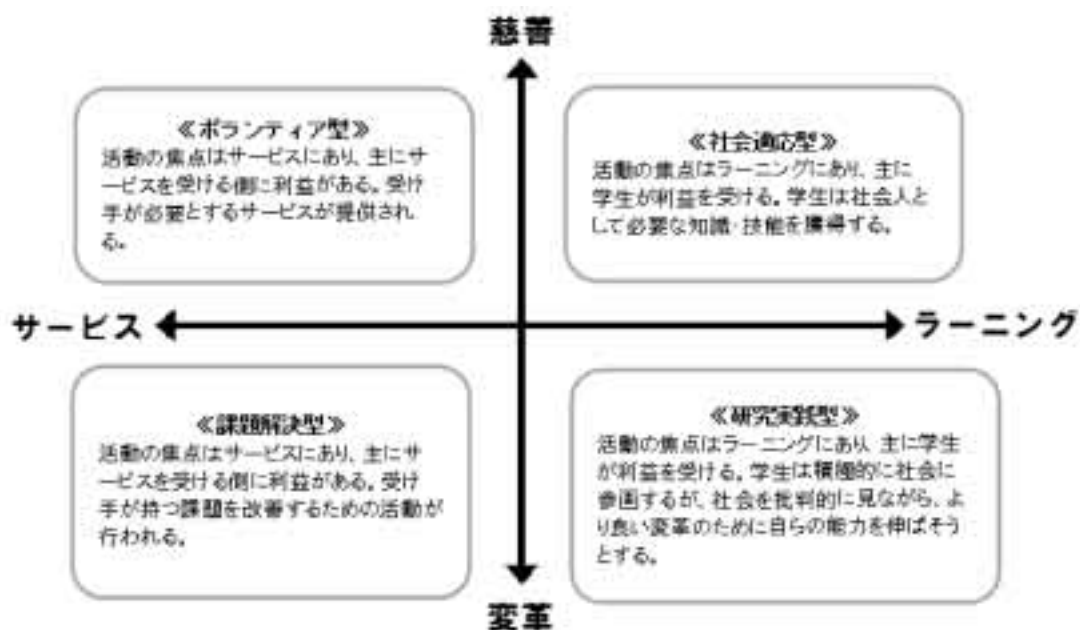
の専門性や特性にかかわらず、貢献を受ける側の課題を解決するだけになり、結局学生が本来伸ばしたい力の伸長に活かされない場合もある。そのため、学生の学びと解決すべき課題のマッチングが適切に行われることが必要であると考えられる。

タイプ4は、活動の焦点が学びにあり、主に貢献活動を行う学生の方に利益があり、変革志向の場合である。学生は社会を批判的に見ながら、よりよい社会へと変革を目指すための能力を伸ばそうとする活動が行われると考えられるため、《研究実践型》とする。批判的に社会を見た結果、見出されてきた課題に対して、いかにして変革していくかということを研究していくなかで、批判力や発想力が身につけられることが期待されるが、学びと変革の傾向が強くなりすぎると、批判のための批判に偏ったり、研究のための貢献活動に陥る場合も考えられる。このタイプは相手の立場に立った貢献活動を充実させることが必要であると考えられる。

2. 日本の大学における SL の類型

2.1. 学生の学びと社会貢献

学びと貢献のいずれの方に焦点が置かれてい



【図2】焦点と志向の組み合わせによる SL の類型

【表2】SLに関する記述から析出される焦点

	焦点
学び	本取組は、大学の初年次にサービスマーケティングを通して、問題解決能力を身につけさせるとともに、現実社会の課題と専門知識との関連性を意識させ、体験と知識を総合化する方法を学ばせることを目的とするプログラムである。 ⁱ⁾
	学生が一人の市民として様々な市民活動団体やNPO法人の活動に参画し、市民とともに様々な活動を体験するプログラムです。そこで、学生は多様な人々との協働を経験し、社会派（ママ）どのように動き、どのように運営されるのかを学んでいきます。 ⁱⁱ⁾
	地域社会と企業が持つ教育力を大学の正規的教育課程に導入することによって、学生に生きた智慧（ママ）や技術を学ばせるとともに、「現場に学ぶ」視点を育み、実践的な問題発見・解決能力など、いわば総合的人間力を養成することを目的としています。 ⁱⁱⁱ⁾
	課題探究型・演習型授業「コミュニティ・サービスマーケティング（I～V）」では（中略）自ら考え、行動する実践力を高めていきます。 ^{iv)}
	いわゆる職業体験（インターンシップ）とは異なり、学生は、自分の置かれた場において、知識や技術、スポーツや運動を通して培った力を活かす新たな方途を見出していく発想力と行動力を身につけることが期待されているのです。 ^{v)}
貢献	インドネシアの児童養護施設にて教育施設や衛生施設の建設、衛生指導など、子どもたちを支える活動を行う「国際ワークキャンプ」。植林で砂漠化を防ぐ「内モンゴル緑化ボランティア体験セミナー」などがあります。 ^{vi)}
	金沢市教育委員会と連携して、学生を小学校にティーチング・アシスタントとして派遣しています。（中略）具体的には、授業における教師の補助や放課後学習の補助を行っています。 ^{vii)}
学びと貢献	新しい時代のニーズに対応し各分野で将来中心となって活躍する人材を養成するため、「問題発見・問題解決能力」（policy literacy）と「デジタル・メディア活用能力」（media literacy）の2つの基本能力を身につけさせ、学生の将来進路モデルを確立できるよう指導を行っています。（中略）政策実践教育が、地域に根ざし地域に役立つようなものでありたいと考えています。 ^{viii)}
	サービス・ラーニングが意義ある教育プログラムであるといっても、どのようなプログラムを組むかによってその成果には大きな差が生じる。たとえば、学生の立場にたてば、短期に途上国を訪れるいわゆるスタディー・ツアーでも「百聞は一見に如かず」という側面があるから決して無意味ではない。しかし、それではいわば修学旅行のようなもので、相手の役に立つかは疑問であるし、負担になる可能性すらある。（中略）質の高い国際サービス・ラーニングを追求したいと考えたからである。 ^{ix)}

- i) 関西国際大学『平成20年度文部科学省選定 質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）「初年次サービスマーケティングの取組」—学士課程における複合的・重層的のサービスマーケティングの展開—最終報告書』、2011年
- ii) 筑波学院大学ホームページ <http://www.tsukuba-g.ac.jp/ocp/offcampus/>（2012年11月25日閲覧）
- iii) 同志社大学ホームページ <http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/pbl/about.html>（2012年11月25日閲覧）
- iv) 愛知淑徳大学ホームページ <http://www.aasa.ac.jp/institution/ccs/subject/index.html#>（2012年11月25日閲覧）
- v) 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部パンフレット「桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部サービス・ラーニング」、2010年
- vi) 桃山学院大学ホームページ <http://www.andrew.ac.jp/international/volunteer.html>（2012年11月25日閲覧）
- vii) サービスラーニングクリアリングハウスホームページ・金沢大学 <http://servicelearning.jp/database/kanazawa.html>（2012年11月25日閲覧）
- viii) 千葉商科大学『千葉商科大学 平成16年度採択現代 GP「地域課題の調査・分析に基づく政策実践教育」平成18年度（最終年度）報告書』、2007年
- ix) 国際基督教大学『平成17年度 文部科学省『大学教育の国際化推進プログラム（戦略的国際連携支援）』採択事業『国際サービス・ラーニングの展開と連携構築』～実践型国際教養教育のアジア・アフリカネットワーク形成～事業報告書（平成17～20年度）』、2009年

るかという点について、学生の学びを重視しているととらえられるものを学びに焦点をおいたSL、相手のニーズに応える貢献を重視しているととらえられるものを貢献に焦点をおいたSL、双方を両立させようとしているととらえられるものを学びと貢献に焦点をおいたSLとして、各大学の報告書、パンフレット、ホームページなどに見られるSLのプログラムに関する記述を析出すると、【表2】のように分類で

きる。

学びに焦点をおいていると言っても、実際には受ける側にとっても利益になる貢献との両立ができている場合もあるだろう。同様に、貢献に焦点を当てていると思われても、実際には学生の学びが得られる場合もあるだろう。実際のバランスを明らかにするためには、より詳細な調査が必要であるが、まずはアクセス可能な資料から分析する限り、9事例のうち、学びに焦

【表3】SLの活動の志向性を示すととらえられる記述

	活動の概要
慈善志向	三木市の観光振興は、地域に活力をもたらし、地場産業の振興並びに新しい産業にもつながることから、コミュニティパートナーである三木市商工観光課からの要請であり（中略）具体的な貢献活動は三木市の観光政策に必要な基礎情報の収集とした。 ⁱ⁾
	外国の方や勉強にやってきた研修員と様々なイベントを通して交流を図ります。 ⁱⁱ⁾
	子どもにレゴ・ロボの作り方を教えます。 ⁱⁱⁱ⁾
	ホームレスの人たちが社会復帰できるよう、生活自立応援事業や就業応援事業等の多面的なサポートを行う。 ^{iv)}
	心の病を持つ方々の福祉作業所のサポートを行う。 ^{v)}
変革志向	キャンパスが所在する長久手市をフィールドとし、行政などと協働しながら世界共通のアイコン（絵文字）を活用した環境マップづくりの企画・運営を通じて、地域が抱える課題とその解決方法を考えていきます。 ^{vi)}
	エコタウン実現プロジェクトーエココミュニティの形成を目指して：エコタウンの実現を目指し、テクニカルな側面、そしてコミュニティ形成の面の両面よりアプローチした活動を行い、現実のプロジェクトにおいて提案を行います。 ^{vii)}
	食育と健康（薬膳と野菜作りで、正しい食事と健康を考える）：健康を食の観点から考える基本的な姿勢を下の2つの課題（薬膳と東洋医学・自家菜園活動）を通じて各自が習得します。また、その成果を一生の財産へとつなげると同時に社会へも発信することを目指します。 ^{viii)}
	④宅配のみでなく草刈り、洗車、部屋の模様替え、パソコン教室など生活のあらゆる場面で高齢者支援の可能性を実験していく。⑤宅配のHPを企画、作成し、どうしたらその利用が行われるのかを実験し、提案する。 ^{ix)}

i) 関西国際大学『平成20年度文部科学省選定 質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）「初年次サービスラーニングの取組」—学士課程における複合的・重層的サービスラーニングの展開—最終報告書』、2011年

ii) 筑波学院大学ホームページ <http://www.tsukuba-g.ac.jp/ocp/offcampus/>（2011年11月25日閲覧）

iii) 上掲ii

iv) 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部パンフレット『桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部サービスラーニング』、2010年

v) 上掲iv

vi) 愛知淑徳大学ホームページ <http://www.aasa.ac.jp/institution/ccs/subject/index.html#>（2012年11月25日閲覧）

vii) 同志社大学ホームページ <http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/pbl/about.html>（2012年11月25日閲覧）

viii) 上掲vii

ix) 千葉商科大学『千葉商科大学 平成16年度採択現代GP「地域課題の調査・分析に基づく政策実践教育」平成18年度（最終年度）報告書、2007年

点をおいているととらえられるものが5事例、貢献に焦点をおいているととらえられるものが2事例、双方を両立させようとしているととらえられるものが2事例みられた。したがって、学びに焦点をおいた活動が多いという傾向があるということが推察される。なお、学びの内容として共通しているのは、問題（課題）発見・解決能力や実践力・行動力を向上させるということである。

2.2. 慈善志向と変革志向

慈善を目的とする活動か、変革を目的とする活動かという点について、【表1】より、地域の必要とする活動を行うものを慈善志向、地域の課題に対し積極的に関与して政策提案を行うようなものを変革志向として分類したものが【表3】である。

各大学に様々なプログラムがあるが、地方自治体の要請に基づいて観光政策に必要な基礎情報を収集する活動、外国人や子どもとの交流を図る活動、ホームレスや心の病を持つ人々に対するサポートなどは、支援を必要とする人々の求めに応じるという性質から慈善志向と考えられる。一方、行政と協働で環境マップづくりを企画・運営する活動、エコタウンの実現を目指して現実のプロジェクトにおいて提案をする活動、薬膳と野菜作りを通して食事と健康について考え、自分の財産にするとともに社会に発信していく活動、宅配・草刈り・洗車・部屋の模様替え・パソコン教室等によって高齢者支援の可能性を実験し、それらの活動が拡大する方法を提案していく活動などは、実際に政治に参加したり、社会の課題を改善しようとしたりすることから変革志向と考えられる。

慈善志向であっても、変革志向のように批判的に見る場合が出てくることがあるであろうし、変革志向であっても実際にはニーズに対応する形態になっている場合もあるだろう。こちらについても実態についての詳細な調査が必要となる。

2.3. まとめ

以上のことから、学びと貢献については、わが国の高等教育におけるSLでは学びの傾向が強いととらえられる。学びの内容としては、問題（課題）発見・解決能力や実践力・行動力の向上を目指したものが多くみられる。また、慈善と変革についてはそれぞれに様々なプログラムがあることから、わが国の高等教育におけるSLはタイプ2《社会適応型》とタイプ4《研究実践型》の傾向がみられると推察される。

3. 桐蔭横浜大学と千葉商科大学の実践について

《社会適応型》と《研究実践型》のSLの実践を詳細に調査するため、関東近県においてそれぞれのタイプを代表すると思われる2大学に対してインタビュー調査を行った。一方は、学生の発想力や行動力の育成を焦点とし、そのコンセプトにあった受け入れ先において活動を行うことから《社会適応型》と考えられる桐蔭横浜大学、もう一方は、問題発見・解決能力とデジタル・メディア活用能力の育成を目指し、高齢者支援の可能性を実験・提案していることから《研究実践型》と考えられる千葉商科大学の2大学である。インタビューの結果をまとめたものが【表4】である。

3.1. 桐蔭横浜大学

桐蔭横浜大学は、「社会貢献論」によって、社会貢献やボランティアに関する基礎理論を学び、その後SL実習を行う。実習先は、「スポーツや身体のもつ力を使って社会に貢献する」というコンセプトに合致する団体を大学が意図的に選択している。実習終了後の振り返りを重視しており、レポートを基にした教員と1対1の面接を数回にわたって行う。最後に各実習先から代表1～2名の学生が自身の学びについて発表し、それぞれの学びを全体で共有する。

学生の学びに関しては、学生が自分の世界の狭さや力の無さに気付き、自分自身について考

え始めるようになること、SL 実習終了後も自主的に実習先に手伝いに行く学生が現れていること、実習経験者が新しい実習生のサポートをし、新しい実習生も先輩の助言によって学びが深まっていることととらえられている。

貢献については、実習先から好かれていること、受け入れ先団体の理念が若者に伝わる貴重な機会ととらえられていること、受け入れ先も大学とともに学生を教育する側という意識を持っていることがわかった。しかし、貢献の内容そのものが実習先に対してどこまでインパクトを与えたかということについての評価はこれからの課題となっている。

実習先は、NPO 法人アドバイザーネットワーク神奈川等との連携や、教職員の人脈を手がかりとして調査の上決定される。ホームレスが社会復帰できるように生活自立応援事業や就業応援事業等の多面的なサポートを行う NPO、心の病を持つ人々へのサポートを行う NPO、難病児とその家族の支援を行う NPO、子どものスポーツ指導を行う NPO 等、約20の団体が受け入れ先となっており、学生はそこで求められる活動を行っている。

Westheimer と Kahne によれば、慈善志向の SL は「求めるものを与える」(道徳)、「民主主義社会に生きる市民として適切な教育を受ける」(政治)とされている。学生はサポートを必要とする人々のための活動、すなわち「求めるものを与える」活動を行っているといえる。

3.2. 千葉商科大学

千葉商科大学は、社会調査法という授業において、地域と学生の双方を結び付ける方策についてアンケートを実施し、商店街と学生が協議した結果、主に高齢者、出産前後の女性、身体の不自由な人を対象として、買い物の代行、草刈り、パソコンの指導などを行う「ボランティア型宅配ビジネス」を始めた。2004年度に現代 GP に採択された「地域課題の調査・分析に基

づく政策実践教育」における特別講義の一環として実施され、GP 終了後も地域の要望があること、学生に対する教育効果が高いこと、大学の社会貢献活動であることから継続されてきた。2010年以降は授業ではなくボランティアという形態になったため、授業という形態であった時には週1回の活動であったものが、現在は学生の意志により週3回の活動を行っている。ただし参加者は授業であった時には20~30名だったものが、現在は3~4名に減少したという側面もある。

学生の学びとしては、主に高齢者を対象とした活動であるために、学生が世代を超えたコミュニケーションを経験することによってコミュニケーション能力が高まること、先輩からの働きかけにより学びが深まること、人生の目標につながるような人との出会いの機会が増えること、人とのかかわりによって自分自身が見えるようになることととらえられている。

貢献については、学生が商店街に出ることによって商店街の活性化につながっていることと、今後は商店街の企画会議等で若い学生の感性や発想が期待されていることなど、商店街の会長から高い評価を受けている。また、商店街の方からも大学生に貢献しようということで、商店街において千葉商科大学生に対する割引制度が行われていることから、その評価の高さがうかがえる。サービスのインパクト評価についての調査は行っていない。

Westheimer と Kahne によれば、変革志向の SL は「配慮をすることによって受ける側の生活や性質がどうなるかについて熟慮する」

(道徳)、「社会に積極的に参加する。政策に批判的な意見を持ち、政治に参加するためのスキルを獲得し、社会的な結束を構成する」(政治)、「行動と批判的な研究が結びつく。その過程を通して、原則としての知識と、彼らが従事する社会問題に参画することの両方の理解を変容させる」(知識)とされている。サービスを受ける側のニーズを調査し「受ける側の生活」

【表4】桐蔭横浜大学・千葉商科大学インタビューのまとめ

	桐蔭横浜大学	千葉商科大学
内容・方法	社会貢献論によって、社会貢献やボランティアについての基礎理論を座学によって学ぶ。実習計画書を作成し、受け入れ先でサービスラーニング実習を行う。実習先は青少年健全育成、子育て支援、難病児と家族の支援など多様であるが、「スポーツや身体を持つ力を使って社会貢献をする学生を育成する」というスポーツ健康政策学部のコンセプトに合致した団体となっている。実習終了後の振り返りを重視しており、レポートを基にした教員との1対1の面接を数回にわたって行う。最後に各実習先から代表1～2名が自身の学びについて発表し、それぞれの学びを全体で共有する。	2004年に「地域課題の調査・分析に基づく政策実践教育」がGPに採択された。その中で行われた5つの特別講義のうち「ボランティア型宅配ビジネス」は、主に高齢者、出産前後の女性、身体の不自由な人を対象とし、買い物の代行、草刈り、パソコンの指導などを行う。商店街の空き店舗を借り、依頼の電話を受け、それに応じるという形態をとっている。GP終了後、2010年からはボランティア活動として継続している。授業であった時には週に1回の活動だったが、ボランティア活動という形態になったことによって、現在は週3回の活動を行っている。授業の時には20～30人の学生が参加していたが、ボランティア活動になってからは3～4名で行っているため、後継者となる学生が必要。
学生の学び	今まで知っていた自分の世界の狭さに気づき、価値観が崩されたり、目指すものが揺さぶられたりする。自分の力の無さに気づく。このように根拠のない自信がいったん崩され、自分自身について考え始めるようになる。一度実習に行った学生が、終了後も引き続き実習先に手伝いに行くことがある。新しい実習生が来たときに上級生としてレクチャーするという例がでてきている。実習生の方も、年齢の近い先輩に言われることで学びが深まる。	コミュニケーション能力が高まる。主に高齢者を対象としているため、世代を超えたコミュニケーションを経験する貴重な機会となっている。ボランティアをすることで満足をしてしまうところを、先輩から課題を投げかけられることでさらに挑戦してみようという積極性が出てくるなど、縦のつながりによる学びの深まりもみられる。インパクトのある出会いによって人生の目標ができる。学外での学びによってそのような出会いの機会が多くなる。さまざまな人から良くも悪くも評価を受けることにより、自分自身が見えるようになる。
貢献	学生は実習先に好かれ、来てもらってよかったと言われる。NPOなどは、各団体の理念が若者に伝わる貴重な機会ととらえている。大学とコンセプトを共有しているので、一つのアクターとして学生の教育に携われることを喜びとしている。したがって、実習中に問題が起こっても、次に改善できるように考えてくれる。受け入れ先に対するサービスになっているかどうかのリサーチはまだ行っていない。	学生が商店街に出ることにより、活性化につながっている。今後は、商店街の企画会議等で、若い学生の感性や発想が期待されている。商店街の方からも大学生に貢献しようという趣旨で、割引制度が行われている。130店舗がこのサービスに参加していることから、学生の活動に対する評価の高さがうかがえる。GPの総括時に商店街の会長から高い評価を受けたが、学生の活動が地域にとってどのような影響を与えたかについてリサーチは行っていない。

※桐蔭横浜大学に対しては、桐蔭横浜大学SLラボにおいて、スポーツ健康政策学部教授の岡本真佐子氏、SL実習プログラムディレクター木下直子氏に対し、2012年10月12日に約2時間のインタビューを行った。千葉商科大学に対しては千葉商科大学本館5階において、政策情報学部教授・地域連携ネットワークセンター長の瀧上信光氏、千葉商科大学大学院政策情報学研究科・ボランティア型宅配ビジネス経験者の繁野春樹氏に対し、2012年11月3日に約2時間のインタビューを行った。

について考えた上で活動を行い、商店街の一員として「社会に積極的に参加」している。こうした調査および活動は、地域が抱える高齢化という課題に取り組むことから始まっており、「原則としての知識と、彼らが従事する社会問題に参画することの両方の理解」の変容を図っていると考えられる。

3.3. まとめ

まず、桐蔭横浜大学は学びに重点を置いており、貢献活動に対する評価は行われていない。しかし、インタビューにおいて「学生に対するフィードバックのためにも、貢献活動に対する受け入れ先の評価についてリサーチすることは必要と考えている」と述べられており、貢献活

動の充実も必要と考えているととらえられる。また、活動は慈善志向であるが、例えばホームレスに対する支援を行うだけではなく、事前あるいは事後の学習等において、なぜホームレスが生まれているのかといった根本的な課題について考え、その改善を図るという変革志向の要素を加えることにより、学びや活動が深まる可能性があると考えられる。

次に、千葉商科大学であるが、こちらも学びと貢献については桐蔭横浜大学と同様のことが言える。活動は変革志向であるが、事業を立ち上げたあとは高齢者が必要な支援に応じるという慈善志向に傾いているととらえられる。変革志向の中には「政策に批判的な意見を持ち」「行動と批判的な研究が結びつく」といった「批判」という要素があるが、自らの活動を批判的にみて常に更新を図ったり、高齢社会に対する国や自治体の施策を批判的にみて政策提案を行ったりすることによって、より学びや活動が深まる可能性が示唆される。

4. おわりに

本研究では、わが国の大学における SL を、学びと貢献、慈善と変革という指標によって分類することにより、その傾向を分析した。

まず、学びと貢献については、学びに焦点をおく事例が多いことがわかった。大学の使命には研究成果を社会貢献に活かすことが含まれるが、企業の CSR 活動と異なり、大学の SL は学生の教育の一環として取り入れられているのであるから、学びに焦点を置くのは自然なことであると言える。しかしインタビューの内容より、学びの実態として、当初目指した問題（課題）発見・解決能力や実践力・行動力の向上ではなく、実際には自分自身への理解を深めると

いうものにとどまっている様子がうかがえる。したがって、SL によって学生を次のステップに進ませるためには、SL がある程度長期的・継続的である必要があるだろう。また、SL は「伝統的な教科のカリキュラムに貢献し、それを発展させるものであること」から、他の科目との連携を図り、横断的・発展的なプログラムを組むことにより、学生の資質・能力の育成を図ることができると考えられる。

次に、SL の目的が慈善志向であるか変革志向であるかということについては、どちらにおいても様々な活動が見られることがわかった。慈善志向においては、根本的な課題を追究するという変革志向の要素を加えることにより、学びと活動の質が高まると考えられる。変革志向においては、立ち上げた活動が軌道に乗ると慈善志向に流れる傾向があることから、建設的な批判という変革志向の要素を意識し続けることにより、学びと活動の質の高まりが期待される。

大学進学率が50%をこえ、あらゆる人に大学で学ぶ機会が保障されるようになったとはいえ、全ての人が大学で学ぶことができるわけではない。大学生には、大学で学ぶことができなかった人の分まで学び、社会に貢献しようとする意志や力量が求められる¹¹。デューイは、人間は本来、個人の自由や人間関係における礼節や親切といった高次の価値を尊重するものであり、それは経験の連続性によって、感情的・知的な態度の形成を含む習慣となっていくと述べている¹²。大学における SL で質の高い経験を学生に提供できるプログラムを組むことができれば、社会においてより良い価値を創造しようとする学生を輩出することができるのではないだろうか。

11 創価大学の創立者である池田大作は「学問や学歴は、本来、立身出世のための道具ではない。人びとの幸福に寄与するためであり、むしろ、大学で学ぶのは、大学に行けなかった人たちに奉仕し、貢献するためである。」と述べている。「池田大作 名言100選」（池田大作著、中央公論社、2010年）

12 ジョン・デューイ『経験と教育』市村尚久訳、講談社学術文庫、2004年、pp. 45-47